

## 夏の妖精大冒険!

杉本 滯

今夏。学校は休みだ。

「うわあ、あつっ〜い!」

ソファーにねころんでそうきけんである、ツインテールの少女はこゆき。こゆきは五年生だ。

「こ・ゆ・き・きゅ!そろそろ川へ行くわよ!」

こゆきを呼んだのは、母だ。

「ええ、わたしも〜?」

もつとだらけていたいと思うこゆき。思わずさけんってしまった。

「お姉ちゃーん、来・て・よお!ゲームかすからあ!」

文句を言っているのは、弟の太陽。二年生だ。

「ああもうっ。じゃあいいよ。まったく。あ、もちろんゲームはかしてくれるよねっ」にやりと笑うこゆき。太陽はしよんぼり。

「もう、早く行こう」

こゆきは太陽をつれて、歩いていった。そして、十分。

「着いたよっ」

「わあいつ!川!川!虫、いるかな?」

魚はいるかな?きれいな石もっ!

太陽ははしやいで、走り出した。

「ちよ、太陽!そっちあぶない〜!」

急いでこゆきはひきとめようとした。が、

「え〜!あつちに光る石あつたもんっ」

太陽はまったく聞かない。

「ぐくん、じゃあ、いいよ。しよーがない」

と、その石をひろったその時!

ザツパア〜ン!

大きな波が二人をおそってきたのです!

「きやあく、た、太陽〜!」

こゆきは、太陽とはなれてしまったのだ。

その時、なんと、こゆきがひろった石から、桃色の光の粉が出てきたのだ。

「え:何、コレ!?!」

不思議なその粉は、だんだん人型になった。

ぼんやりとしか見えない。

「主人様:ですね。助けてあげましょう!」

小鳥のように高く、きれいな声。その人型のは手(?)を挙げた。と、そのとたん、こゆきはぐらりとめまいを感じた。周りは妙に明るい気がする。あわてて周囲を見回すと、そこは、とてもおだやかな流れの、川の前。太陽もふつうにつりを楽しんでいる。

「あれ:!?ユ、ユメ:だったのかな?」

しかし、夢ではないような気がした。とてもリアルで、不思議な感覚。

「ふふふっ。夢じゃないわよっ」

また、さっきの声があった。イタズラっぽく笑っている。

「だ、だれっ!?!」

こゆきはさけんだ。

「わたしはじゅびか。妖精よ」

その声と共に、石からはキラキラした光が出てきた。

「え、石:。いつの間に:?!」

光はだんだん集まって、人の形になった。

羽がはえていて、髪はポニーテール。

そして、川の水のようなすきとおった青。

服にも同じような色のリボンがついて、

スカートはしずくのようなデザイン。とてもキュートでかわいらしい。

「わっ。ナニコレッ!?小さくいい!かわい〜♡」

こゆきは感げきしてさげんだ。

「シッ!他の人にバレると大変だから、静かにっ!」

じゅぴかか小声でびしりと注意した。

「ところで、わたし、住む場所ないんだけど…住ませて?」

じゅぴかかニッコリ笑った。

「OK、OK!かわいいいし、飼ってあげる」  
そのとたん、じゅぴかの様子が一変した。

「…飼…?!」

どうやら、ペットあつかいされるのがいやなようだ。

「あっ、ゴメンゴメンッ」

こゆきはあわててあやまった。すると、きげんがなおったようで、

「じゃ、いいよ」

とつぶやいた。

その日の夜から、じゅぴかか、こゆきの部屋でくらすことになった。

「えーっど…?ベッドOK、机もOK…」

あとは…」

こゆきはいそがしそうにしている。指をさしているのは、人形用のベッドと机

どうやらじゅぴかの家具をそろえているようだ。

―数分後―

「よしっ。これでどうっ?!」

自まん気に見せた、じゅぴかの家は、とても小さくかわいらしいものだった。

カーペットがわりにいらなくなったハンカチ、かえの服は人形のドレスやワンピース。ちようどいいサイズで、おまけにバッグまで。

「えへへ。もうさすがに人形遊びはなし、ゼーンぶじゅぴかのだよっ♪」

それを聞くと、じゅぴかか満足そうにカーペットにねころんだり、服をながめて何かつぶやいたり、こゆきの部屋の鏡に向かって、「わあっ。コレ、いいっ」などとさげんでいる。その部屋が気に入ったようで、しばらくすると、じゅぴかかぐっすりねむりこんだ。

次の日の朝。

「こゆきー、お・き・な・さーい!」

こゆきの母の声で目が覚める。

「ふわあぁ、おはよ〜」

こゆきはおきて、真っ先にじゅぴかの

部屋を見る。じゅぴかかねているようだ。あまり布で作られた花がらのふとんで顔までかくしてねている。

(そっとしと〜。)

こゆきはじゅぴかか起こさずに、一階へ下りた。リビングへ入ると、太陽はもう朝食を食べはじめていた。こゆきも急いで朝食をすませ、ぐうたらしだした。

「行ってきまーす。ちゃんと食器洗いと宿題しといてねー」

玄関から声がとんでくる。

「はあ〜い:」

こゆきはしよんぼり。そして、とぼとぼと食器を洗いはじめた。と、何かがとんできた。

「わっ。えっっ?!じゅ…ぴかっ?」

なんと、とんできたのはじゅぴかだった。

「もうっ。見つからないように来るの、大変だったのよっ」

「あー、ゴメン、ゴメン。こんどからはちゃんと起こしに行くから」

しかたないなあ、というように言った。が、その時、太陽が近づいてきた。

「ねえ、こわかんないんだけど〜」

わからない問題があるようだ。

「わっ、見つかるっ!!」

あわててじゅぴかをかくすこゆき。

「フツッ、あぶないい〜」

こういう風にじゅぴかが太陽にみつかりそうになることもたびたび起こる。

そんなある日のこと。じゅぴかの部屋の机の上に、見たことのないものを、こゆきは見つけた。一見、本のようなだが、表紙には題名がない。そして、代わりにカギ穴がある。

「ねえ、じゅぴか、コレ何?」

こゆきはどうしても知りたくなり、思わず聞いてしまった。

「あつ、コレッ?あのね、こーやって使うの」

じゅぴかはそう言うと、こゆきがあげた人形用のバックからラメ入りのピンク色のぼうをとりました。

「何コレ?えんぴつ?」

「フツプー。これは、うーんっ。人間でいうと『タッチペン』みたいなかんじかなっ」

そう言って、じゅぴかはそれを数回まわし、ポンツと本(?)をたたいた。そして、それを三度ぐらいくりかえした。す

ると、本(?)がさわってもいないのにひらいたのだ。

「フフンツッコレは暗しよう番号も記録しておけるのだ。すごいでしょっ。あつ、それから…」

じゅぴかは本のページをめくるのではなく、スライドした。すると、書いてある文字が動き、メニュー画面になった。

「わーっ。何!?すっごーい☆」

こゆきは興奮してさげんだ。

「えっへん。これは人間で言う、いわゆる、えつと…スマ…ナンチャラ!」

「あつ、スマホねっ!」

こゆきは答え、じゅぴかはハツとした。「ああ、そーそー!それでね、何か調べられるし、物を買えるの!」

そう言うと、じゅぴかはスライドし、「たとえば、この『マジカルパールネットレス』がほしいとすると…ホラ、ここに効果とか、デザインのポイントとか書いてあるでしょ」

じゅぴかが指さした所には、『効果…このネットレスはつけると今日のラッキーカラーや運勢がわかります』と書かれて

いる。

「へえっ。すごいっ。他にはどんなのがあるのっ。かしてよっ」

こゆきはじゅぴかから取りあげようとした。

「あ、ちよつとっ!それ、人間にはムリよっ。サイズもあわないしっ…」

じゅぴかはもう一度こゆきの手から取り返した。

「もう、知らないからねっ。そもそも、こゆきのほうから取ったんだしっ」

じゅぴかはおこって部屋をとびだした。「フンツ。なによ、ケチ!あんなヤツ、知らないもんっ」

じゅぴかが出て行った、一人きりの部屋で、静かに言った。

しかし、数分後、やっぱりさびしくなってきた。じゅぴかはどうしているのだからか、と考えてしまう。

「じゅぴかがかさないのが悪いんだもん」と言ってみたが、やっぱり心配になってきた。

(よしっ。探しに行こうっ)

こゆきは決意した。

そのころ、じゅぴかは、家の外にいた。

運よく人通りが少なく、まだ見つからない。

(これからどうしよう…)

考えながら先へ進むと、何かにぶつかった。

「いてててて…」

顔をあげてみると、人がいた。年は小学二、三年生くらいの子。

「ん？なんじゃこりや？虫…？いや、妖精!？」

男の子はびっくりして、じゅぴかをらんぼうにつかみ、走っていった。

「わあああ〜っ！」

しばらくたつて、ついたのはだれかの家。見回すと、何人かの子供たち。さっきの男の子もいる。

「わっ、動いたっ！」

「すっげーっ。テレビに出れるじゃんっ」

みんなであわあさわいである。

(こゆき、助けてよお〜)

じゅぴかは心の中でさげんだ。

「じゃあ、他のとこへ見せてくるっ」

男の子はまた走り出した。

場所はかわって、ここは住宅街。こゆきは必死に走りまわってる。

「じゅぴかっどこおっ!？」

するとまがり角から、急に男の子がとびだしてきた。男の子は何か、人形のような物をもっている。

(じゅぴかっ!?)

服も、髪の色も、まがいなくじゅぴか。

「わあっ!ちよつとまわってええ〜っ!」

こゆきはあわてて走り出した。しかしあまり足が速くないので、見失ってしまった。がんばって探したが、見つからない。すると、おなががへってきた。なので、ポケットから探す前に急いで机からとってきた、あめをとり出した。

(あれ、いつもとちがう…。ま、いっか)

そう思いながら食べてみると、なぜかじゅぴかの映像が頭にうかんできた。虫かこの中でさげんでいる。

(ま、まさかっ…。あれ、太陽…と家の庭?)

そう思つて、家に帰ると、家の庭に子どもたちが集まっている。その人だかりの中心には、なんとさっきの映像と同じように、じゅぴかがいた。

「じゅぴかっ!こめんねっ!」

半分泣きながら、こゆきはじゅぴかを

助け、わけを説明した。そして、こゆきは後で知つたが、あのあめはじゅぴかのものだったらしい。しかし、もうけんかはしなかった。  
そして、じゅぴかとこゆきは、仲良く楽しくくらしした。